34

大阪府立中之島図書館所蔵『鑑』と西忍『薮明集』の関係について

鈴木　達彦[1,2,3]，平崎　能郎[3,4]，並木　隆雄[3]

[1] 帝京平成大学薬学部，[2] 北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部，
[3] 千葉大学大学院医学研究科和漢診療学，[4] 千葉大学医学部付属病院プレストセンター

西忍は田代三喜と曲直瀬道三に師事したとされており，曲直瀬流の医学を解明するうえで検討すべき人物であり，西忍に関係する医書も写本資料及び刊本資料が残されている．演者らは，2019年の日本医史学会学術大会において，西忍の代表的な著作である『薮明集』の原書に近いとみられる写本資料が，大阪府立中之島図書館石崎文庫に所蔵されていることを報告した．

本研究では，同じく石崎文庫に所蔵される『鑑』と『薮明集』の関係について報告する．石崎文庫所蔵『鑑』（692/193）は，二冊の写本資料で，序文，跋文，内題を欠いており，目録上は室町期の成立とされている．本書は，薮明集に近似する内容となっている．

『鑑』の第二冊から検討すると，冒頭から「二十四候脈」，「諸証順逆吉凶之事」があり，写本資料の石崎文庫『薮明集』（692/197）の巻一の脈論に関する部分とほぼ同じ内容であった．そのあと，節は区切らないが，石崎文庫『薮明集』の巻二「薬剤治証據要部」と近似した能毒部分が続く．2019年に報告したように，石崎文庫『薮明集』の能毒部分は，上中下巻に分かれ，生薬の配列は，道三の初期能毒書のいずれの系統とも異なる配列であるが，『鑑』は上中下巻の区別がなく，生薬の配列は多くの場合石崎文庫本『薮明集』の配列をとっている．文書の文体をみると，石崎文庫本『薮明集』は，仮名交じり文体で，これも道三の系列の仮名の振り方とは異なっている．対して，『鑑』は文書の内容自体は石崎文庫本『薮明集』と近似しているが，仮名交じり文は，石崎文庫本『薮明集』よりも短く簡素になっている．田代三喜と曲直瀬道三の能毒書を比較すると，三喜は生薬の効能から独自に作字した生薬名の表記を採用しており，道三は三喜の能毒を受け継ぐにあたって，特殊な作字は用いないが，代わりに一字薬銘で記された生薬名の四隅，または中央に色分けした点を打ち，生薬の気味を表すという表記法をとった．石崎文庫本『薮明集』では，気味を示す点はみられないが，『鑑』では存在しており，巻末に点の位置がどのような意味を持つかを図示している部分もある．

『鑑』の第一冊では医論が述べられており，中風門，傷寒門，積聚門，脹満門，痢病門，癆サイ門，感冒門，瘧疾門，嘔吐門，淋病門，下血門，霍乱門，黄疸門，脚気門，膈噎門，頭痛門，痰飲門，喘急門，腰痛門，脇痛門，疝気門，消渇門，五痔門，欬逆門，秘結門，腫物門，金瘡門，婦人門，小児門の29の病門別になっている．石崎文庫本『薮明集』に相当部分を探すと，巻四に中風門，傷寒門，積聚門，脹満門，痢病門，泄瀉門，気門の8門があり，巻五には感冒門，欬嗽門，新病ノ咳門から小児門の20門がある．『鑑』と石崎文庫本『薮明集』では，病門の項目や配列などがやや異なり，病門に書かれる内容も近似はしているが一致はしない．『鑑』の1冊目の内容は，かえって版本の『薮明集』巻四と近似している．『鑑』では「十二味」という処方が頻用されているが，刊本『薮明集』巻一には，「陰ノ本方十二味　順気養栄湯」と「陽ノ本方　十宝湯」が記されており，関連が推測される．

以上より，石崎文庫所蔵『鑑』は写本系の『薮明集』の異本であることが認められ，写本から刊本の形成に至る一資料として検討に供すべき資料であるということができる．